

昭和七年五月

新舞台 新編 義経

第三回 延喜式 按劄 奉

東京劇場



は月五の場劇京東

大阪 文楽座人形浄瑠璃芝居
一全座部引越大興行

當り四日八日 十五日間 (藝題三日間) 五つづ回替 (り迄)

第三回藝題 (自十日三日間)

菅原傳授手習鑑

車場 の 段

傾城反魂香

吃又名筆の 段

近江源氏先陣館

和田兵衛上使の 段

梅川冥途の飛脚

盛綱首實験の 段

淡路町の 段

三勇士名譽肉弾

新封印切の 段

御入場料

昭和七年五月十日初日
毎日三時開演

一等(御一名)金 四圓
二等(御一名)金 二圓八十錢
三等(御一名)金 二圓八十錢
三階(御一名)金 八十錢
前賣券御利用願上候

諸種の御會合にはお芝居の御利用を願ひます。

電話京橋五一五より五一五五まで

電車 歌舞伎座前 本願寺前 下車

築地 東京劇場

電話京橋 五一五より 五一五五まで

名連線味三・夫太

竹本相益太夫	竹本若松太夫	豐竹英太夫	鶴澤友花	竹本津之子太夫	鶴澤綱治	竹本土佐子太夫	鶴澤小重	竹本越名太夫	豐澤仙三郎	豐竹長太夫	鶴澤友駒	豐竹小松太夫	野澤吉貞	竹本播路太夫	野澤市之助	竹本淀路太夫	豐澤團伊三			
竹本文太夫	鶴澤友造	竹本南部太夫	野澤吉彌	竹本鏡太夫	鶴澤友衛門	豐竹つばめ太夫	豐澤仙糸	豐竹呂太夫	鶴澤	竹本相生太夫	鶴澤清二郎	竹本大隅太夫	鶴澤道八	豐竹古靱太夫	鶴澤清六	竹本土佐太夫	野澤吉兵衛	竹本津太夫	鶴澤綱造	鶴澤友次郎

名連遣形人

吉田扇太郎	吉田玉幸	桐竹紋十郎	吉田小兵吉	吉田玉松	桐竹政龜	吉田玉七	吉田玉次郎	吉田文五郎	吉田榮三
吉田文之助	吉田覺三郎	吉田兵次	吉田光之助	吉田玉市	吉田飄壽呂	吉田傳之助	吉田玉德	桐竹紋太郎	三桐竹門造

文樂人形淨瑠璃擁護會規約

第一條 本會は文樂座人形淨瑠璃擁護會と稱す
 第二條 本會は文樂座人形淨瑠璃及斯道を擁護するを
 目的とす

第三條 本會の趣意を賛成するものを以て會員とす
 第四條 本會の趣意に賛成し金壹百圓以上を寄附した
 るものを特別會員とす

第五條 本會に左の役員を置く

會長 一名 副會長 一名
 理事 十名 評議員 若干名

第六條 評議員は總會に於て選舉し會長副會長及理事

文樂人形淨瑠璃擁護會理事

伊原青々園 安部亮豊
 石松川木舟 佐藤義一郎
 近田秋江 結城禮一
 和田英作 三宅周太郎
 山崎紫紅
 (イロハ順)

事務所

東京市小石川區原町三十一

文樂人形淨瑠璃擁護會

振替口座東京四九八一一番

第七條 役員は任期は三ヶ年とす
 第八條 本會の經費は會費及寄附金を以て之に充つ
 第九條 本會の會費は年額金六圓とす
 第十條 本會は右會費六圓の中にて年一回理事會に於
 て定めたる日程の觀覽券一枚を配付するもの
 とす

第十一條 總會は一ヶ年に一回開會す

但し理事會に於て必要と認むる場合は臨時
 會を開く事あるべし

観劇おぼえ

昭和七年五月 日

菅原傳授手習鑑に就いて

傾城反魂香に就いて

近江源氏先陣館に就いて

梅兵衛川冥途の飛脚に就いて

三勇士名譽肉弾に就いて

備考

御書様方へ
特に御願ひ

◇お場席へ御携帶品をお置きのまゝお立ちになりますと紛失の恐れが御座いますから、何卒お持ちになるか或は御携帶品預り所へお預け下さるやうお願ひ致します。

◇お履物になるべくお靴かお草履が御便利です。下足預り所が混雑致しますので



切 三勇士名譽肉彈

下元旅團長	竹本大隅太夫
江下一等兵	竹本相生太夫
北川一等兵	豊竹呂太夫
作江一等兵	豊竹つばめ太夫
松下中隊長	竹本鏡太夫
小隊長	竹本南部太夫
馬田軍曹	竹本隅榮太夫
内田伍長	豊竹長太夫
便衣隊	竹本淀路太夫
三味線	鶴澤友次郎
	鶴澤友次郎
	鶴澤友衛門
	鶴澤清二郎

松居松翁 原作
 鶴屋南北 脚色
 鶴澤友次郎 作曲

切 三勇士名譽肉彈

「爆彈三勇士」の功績は演劇、映畫、歌曲其他あらゆる方面に作られて絶讃されてゐますが爰に日本が世界に誇る唯一の郷土藝術交樂座人形淨瑠璃に是非上演し不朽の名譽を胎し傳へんため永い傳統を持つ人形淨瑠璃道に新境地を拓いて劃期的なるこの上演を見た次第であります。昭和七年二月二十二日上海に於ける皇軍が戰略上敵陣地廟行鎮を是非占據せねばならぬ。突撃路開拓の決死隊に撰ばれた中の作江、江下、北川の三

勇士は祖國のため自ら體に爆藥の破壊筒をつけて世界空前の壯烈な戦死をした大和魂の奮ひ立つ一曲であります。

(床本)

志士は溝壑にあるを忘れず勇士は其元を喪ふを忘れずとかや、時しも昭和七年、月は如月下二日御國に忠を築紫路の譽も高き三勇士、語り傳ふる敷島の大和の國の櫻花幾千代かけてにほふらん。爰は所も上海に近き村落麥家宅、霜さへ氷る曉に間近く敵を沖の石かはく間もなき汗や血に、まみれてつくす工兵の其壘壕に前進の命を松下中隊長折しもあれや舊曆の十

人形

胡弓 鶴澤友 駒

松 下 中 隊 長
便 衣 軍 曹
馬 田 少 尉
大 島 少 尉
東 島 少 尉
古 島 一 等 兵
高 野 一 等 兵
黒 澤 一 等 兵
村 田 一 等 兵
村 上 一 等 兵
北 川 一 等 兵
江 下 一 等 兵
作 江 一 等 兵
下 元 旅 團 長
内 田 伍 士
兵 士

吉 田 玉 松
桐 竹 紋 太 郎
吉 田 小 兵 市
吉 田 玉 幸
桐 竹 政 龜
吉 田 光 之 助
吉 田 覺 三 郎
吉 田 飄 壽 呂 德
吉 田 飄 壽 呂 德
吉 田 飄 壽 呂 德
吉 田 飄 壽 呂 德
桐 竹 紋 十 郎
吉 田 文 五 郎
吉 田 文 五 郎
吉 田 文 五 郎
吉 田 文 五 郎
大 田 文 五 郎
大 田 文 五 郎

七日の月夜、怪しみの人のうごめく影、誰か、ハイ私は廟行鎮鐵條網ある咄し澤山、する事有中隊長殿怪しい奴をとらへました、ムよし連れて来い、ハイ、オイ、言事が有ならそこで言へ、それ廟行鎮中々堅い、機關銃澤山ある日本兵少ない中々落る事ないナ、外へ廻るヨロシイナ、黙れ責さまは誰に頼まれてそんな馬鹿な宣傳をしに廻りよるか、怪しい奴だ、馬田軍曹繩れ、ハハア中隊長殿危ない事でしたナ、あぶない事だつた、オイ、馬田軍曹そやつ何か持てるないか身體検査をして見よ、ハア中隊長殿軍隊手帳がありました、ムそふか、第十九路軍の正規兵で

す。ムで扱はそうかと顔見合せ、油断ならじと囁やく折しも軍用電話、けた、ましく内田伍長は取上てハ、ハ、ハ、松下中隊で有ます旅團命令で有ますか、ハ、ハ、ハ、復誦、本隊は其主力を持て二十二日午前五時三十分を期し廟行鎮の總攻撃を開始す、松下中隊は其正面の鐵條網を爆破し、五個所に歩兵突撃路を開くべし、終り、ハ、ハ、ハ、分りました。中隊長命令が参りました、ム、中隊長殿電話に出て下さい、よし、ハ、松下大尉であります、ハハ分りました、本中隊は直ちに決死隊を募り確かに其時間までに敵の鐵條網を破壊し完全に突撃路を開きます。

終り、と答ふる聲も覺悟の一諾、馬田軍曹進み寄り、中隊長殿旅團の御命令でもあの敵の鐵條網は實に構築堅固で我様撃機が日夜必死の奮闘の未だ何等の効果も無く尋常一様の手段では逆も駄目だと思ひます。とつぶさに語る敷情に、松下大尉につこと笑ひ、其出来ない事を仕遂るが日本軍人の誇りで有る。日本軍人の上には常に天祐有て守るゝ、是日の本の常ぞかし、小隊長集れ、只今の旅團命令に依て當中隊は決死隊を募る、大島小隊長は三名宛二組の先發班、後續班の決死隊を選抜せよ、東島小隊長は豫備班として三名の決死隊を選抜せよ、終り、復誦、大島

小隊は、三名宛、二組の先發班後續班の決死隊を選抜します終り、よし、小隊長は選抜兵を集めてくれ、ハイ第一小隊島田一等兵古川一等兵高野一等兵、黒澤一等兵村田一等兵村上一等兵集れ、第二小隊北川一等兵江下一等兵作江一等兵集れ、聲に應じてばらくと居並ぶ諸士の勇しや、氣を付け、番號、一、二、三、四、五、六、七八、九、集合終りました、よし扱て、九名の者に中隊長は一言す、只今旅團命令が降た、本中隊は正面の鐵條網を破壊し、五條の突撃路を開くべき重大なる任務を受たは本中隊の無上の光榮である。しかし此作業は尤も困難である。さ

れば今日迄多くの兵士は倒れ、様ざまの犠牲を拂つたが中々堅固の要害である。本隊は誓て、此名譽ある任務を全うし、目的を成就しなければならぬ、そこで爰に決死隊を募る、依て此決死隊に選抜せられたお前達は一命を賭して此任務を全ふしてくれ、ハイ、我々は決死の覺悟をもちまして、事に當ります、チ、よく言つてくれた、嬉しいぞつ、諸君が國家の爲に盡さんとする赤誠の精神に對し松下大尉愈々感激にたへない畏れ多いことではあるが、大元師陛下に置かせられては此忠誠を聞き召さば嘸や至情の發露ぞと御嘉納あらせらるゝ事であらふ、皆わかつ

たか、ハイ、わかりましたと意氣
冲天の勇士の言葉、チ、勇ましい
天晴だ、と口には言へど心には御
國の爲とは言ながらあたらず勇士を
戰場の土と化するか、哀やと怯む
心を取直し、氣を付け、只今より
擧手の禮を以て袂別にかへる敬禮
互に擧手の一禮はこれぞ此世の名
残りぞと別れてこそは進み行く。

時の至るを三人が月の光りをあ
びながら、語るも清き、戰友の胸
の内こそ由々しけれ、作江伊之助
こなたを見るや、ア、月はますま
す冴えてゐるナア、オイ北川なに
をぼんやり考へてゐるのだ、何か
國の事でも思出したのか、ナニそ

うじやないよ、おれはひそかに謀
事をめぐらしてゐる、とでもいふ
のかな、兎に角考へてゐるんだ、
ナニ謀事ハ、：考へもくそもあ
るものか、此場合手段はたつた一
つしかないのだ。貴様の手段での
は大抵見當がついてるよ、負す嫌
いの貴様の事だから、鐵條綱へ喰
ひつかふとでも言ふんぢやろ、狼
じやなか、よせやい、アハ：互
ひに通ずる心と心、オイ江下ゐる
かと言ひつゝ來る内田伍長ハツ江
下居ります、お前國から、郵便が
來てゐるぞ、お前ばかりうまくし
てゐるナア、貴様も昨日來てたじ
やないか、そふだつたナア、併し
お前達選抜にあつてよかつたな、

中隊長殿の御訓示もあつたが皆し
つかりやつてくれよ、中隊長殿の
處へもう一度來るだらう、其時又
逢はふ、待てるぞ、と言捨てこ
そ急ぎ行く、江下手紙取上れば、
オイ江下どこから來たんだお父さ
んからか、イヤ家からじやない
よ。何處かの子供からだ、では慰
問の手紙か、ア、コレハ此間日本
を立つ時久留米の停車場で逢つた
少年からの手紙だ、フム、ではお
前に天子様の爲に働いて下さいと
いふ、激勵の言葉を與へてくれた
と言つて、スツカリ昂奮して居た
アノ小學生からの手紙なのか、お
れはアノ少年の一言の爲にいつで
も死ぬる氣になつて、愉快に日本

を出て来る事が出来たんだ、モウすぐ死るかもわからないが、こふして呑氣にしてゐられるのは矢張りアノ少年の力なんだ、マア見てくれよ、こんな事が書いてあるよ、私の大事な兵隊さん、あなたは立派な手柄をして、久留米へ歸つて来る日を私は毎日指を折てまつて居りますよ、あなたの凱旋の時には家中お父さんもお母さんも兄さんも妹もみんな迎へに行きます、私の大事な兵隊さん、本當に天子様の爲に働いて死なないで歸て来て下さい、ア、可愛い事をかくもんだナア、他人でさへこんななもの、北川、江下に貰ひ泣きはいいが江下が死んだらお前も

死ぬか、江下が死ななかつたつて、どふせ死ぬんじやないか、ウム、そふだ、アノ鐵條網と來たら今まで誰も手がつけれなかつたんだからな、一寸でも傍へよればソクボウ砲や爆擧砲であびせかけられるんだから、どふせのがれつこはないんだ、そふだ、破壊筒をかつぎ込んだところで、口火をつける前にみんなやられて仕舞んだからな、今度こそは此我々の最後の働きが日本軍隊の運命に關するんだから、しつかりやらなくつちやいけんぞつ、ム、さつきお前が言つた謀事と言つたのは其手段を考へてゐたのか、俺も先刻から決心してゐたんだ、決心ならおれだつて

してゐるんだ、それなら三人共同じ事を考へてるんだな、そふだ、じや破壊筒を自分の體へくもりつけて體と一緒に爆發させる考へなんだナ、ウム此方法が一番上策なんだからナ、上策の下策のといつてコレが日本軍隊に取てた一つの名策なんだ、自分自身が爆裂弾と一緒に敵の鐵條網へ飛込まふといふんだ、是程慥な爆發の方法はないからナ、やろか、やろふ、しつかりやらふぜ、日本帝國の爲だ作江、江下、北川、サコレデお互の一生の別れだ、水盃といふ處だがどふせ火に燒かれて死ぬ體だ一つ煙草の吞廻しといふのはどふだらうナ、成程、こいつは面白い

デハ作江、お前から呑み初めろよ
じやおれから呑むとしよふよし來
た、煙りはうすき紫の其あかうば
ふ譽れの火互ひに目と目心と心
併しこうして死を決して見ると存
外氣が樂になるもんだナア、おれ
ア是から芝居でも見に行く様なほ
がらかな氣がしてゐるんだよ。お
れだつてそふだ、こうなると何だ
か呑氣になれたよ、併しうまく鐵
條網に近付ければいいが、そこが
天祐だ、此三人の意氣で彼奴等を
めくらにして見せらアオイソーラ
見ろ、雲が出て來たぜ、月が隠れ
てくれりやいゝがナア、フんアノ
雲の具合じや、大丈夫だ、ハ、アい
月だナア、十七日の月だ、アレを

見ると思ひ出さずにやゐられねエ
ナ、お國の母さんに別れた晩の事
か、作江アノ晩の貴様の話を聞
いた時、おれは貰ひ泣をしたよお前
のお父さんに日露戦争のとき輜重
輪卒だつたので、勳章一つ貰はず
に歸つて來たといつてお母さんは
一緒になつて口惜がつてゐたそう
だな、今度こそは此事を聞たらお
前のお母さんも泣いて嬉しがるだ
らう、ム、子供の時から始終言はれ
てゐたんだ、立派な軍人になつて
國家の爲に働いてくれつて、其時
が今恰度やつて來たんだ、おれは
それを思ふと北川、江下俺も嬉し
いよ、しつかりしろよサアモウ時
間も迫つて來たから、そろく仕

度をしなければなるまい、フム中
隊長殿に此計畫を報告して行かな
隊長殿はいけないだらふ、サアアノ
人情深い中隊長殿の事だから、い
くら決死隊とは言へ、始めから死
でかゝる様な無茶な事は許さない
かも知れないぞ、それもそうだ謀
事は密なるを何とか言ふ事がある
だらふ、仲間にも黙つて別れた方
が一層サバくしてよかばい、成
程それもそふだナ、男らしくて、
其方がいゝや、サア是で此世に思
ひ残す事はない、ではボツ／＼出
掛けよふぜ、折しもきこゆる機關
銃、三士は耳を傾けて、オ、先發
班が出發したぞ、爆發せんじやな
いか、不發らしいぞ、オウ後續班

も出發したぞ、やられたらしい
 な、フム味方は慥かに仕損じたぞ
 あきれて暫し言葉なし、馬田軍曹
 かけ来り、オイ残念だ先發班後續
 班も全滅したぞ、残るはお前達ば
 かりだ。右翼は危機に瀕してゐる
 大日本帝國の爲だ頼むぞくくく
 言捨て、こそ急ぎ行く、サ愈々や
 るのだ、見ろ月が隠れたぞ、天祐
 だべたぞ有難いくくく三人目と
 目を見合はせて、心の覺悟御國の
 爲、身は肉彈の三勇士、流石は櫻
 大和の誇り、其花またぬ勇士と勇
 士、互ひに抱き月影も雲にかくれ
 て打出す砲彈の響き轟きて廟行鎮
 の要害は蜘蛛手と張りし鐵條網近
 づく事もならの葉の此手かの手も

盡果て、策をほどこすすべもな
 し、折しも忍ぶ三人の影、破壊筒
 をひんだかへ亂射亂撃ものかはと
 探照燈の光りをさけ、鐵條網にせ
 まり行く、天祐だぞ、オイ、點火
 だくよし来た、天皇陛下萬歲大
 日本帝國萬歲くくの聲もろとも、
 天地もゆるがす大爆音さ、しもほ
 こりし堅壘も破れて爰に突撃路、
 夜は明はなれ東天に輝き昇る日の
 御旗下元少將しづくと隊伍と、
 のへ立出る。氣を付けつ、松下大
 尉の報告を委しく聞いて旅團長あ
 またたび打うなづき、扱ては北川
 江下作江の三勇士の爲に堅固の鐵
 條網も破壊され突撃路は開かれ容
 易に我軍の勝利になつたるも、皆

是三勇士の賜物じや、爰に下元旅
 團長以下戰友一同謹んで三士の英
 靈に氣を付け捧げ銃、(これより軍
 歌合唱) 肉彈こゝに奏功の譽れを
 世々に傳ふらん。

昭和七年五月八日印刷
 昭和七年五月十日發行
 東京市本郷區駒込富士前町
 四十三番地
 編輯兼發行人 藤田篤
 東京市小石川區久堅町百〇八
 番地
 印刷者 東興亮
 東京市小石川區久堅町百〇八
 番地
 印刷所 共同印刷株式會社